

非日常の時（心を遊ばせる）をつくること・・・

こんにちは！サーマルタンクの南洋技研工業です。台風4号の上陸、各地で被害が発生してしまいました。6月の台風で日本に上陸したのは8年ぶりとのことですが、地球規模での気候の変化によって、ちよつとこれまでに無いような竜巻なども起きていることを考えると、気象の変化には十分注意を払う必要があるなど感じさせられます。

さて、話は全く変わりますが・・・

5月に従姉に誘われて劇団四季の「オペラ座の怪人」を観に行ってきました。物語りは19世紀、歴史あるオペラ座に住むという怪人、実は不遇の星の下に生まれた天才的な才能を持つ男性エリックが、一人の美しい女優、クリステイーヌに恋をし、その才能を開花させていくが、それが、クリステイーヌに恋人が出現したことからやがて嫉妬から狂氣的な殺人事件に発展、そして最後はクリステイーヌの純粋な愛の前にエリックは・・・と、何とも切ないストーリーとなっております。（原作者はガストン・ルルーですが、ストーリーはアレンジされています）

劇団四季の公演はこの他に「キャッツ」なども観しましたが、最初からいきなり引き込まれてあつという間に時間が過ぎてしまいました。出演する人たちの鍛え抜かれた身体、音量そして表情は、鳥肌が立つほどの感動を与えてくれます。終わって劇場を出てからもしばらくはその感動が続いて、乾いた大地に水がしみ込んでいくような感覚にとられました。

なかなか厳しいこのご時世、つい日常の仕事や雑事に追われ、ともすると機械的に過ごしてしまい、感動とは無縁の世界で生きてしまいがちです。しかし、そうなるとモノの見方・考え方が凝り固まってしまい、新しい観点を見い出せず、発想も浮かばなくなってしまう・・・。今回の観劇で、いかに非日常の時を作ることが大切か、ということに気づかされました。芸術には疎い私ですが、これからもたまに心を遊ばせる時を作りたいと思います！（元来遊び好き??）

日本の野鳥シリーズ

やはりメボソは

技術営業部 佐藤 弘

私が片手にエゾムシクイ他方にメボソムシクイの脚を持ち、それぞれ全身が見えるように、皆様の目の前に生きている二羽を並べたとする。そして、これはウグイス科の同じ種類の鳥です、とシレットと嘘をついても見破る方はまずいないと思う。

両種は共に東南アジアでの越冬から戻り、山地で繁殖する。低山帯を好むエゾは澄んだ声で「ヒーツーキー」と鳴く。メボソはより標高の高いところを好み「ゼントリ」と聞きなす四音節を繰り返す。一方、春の渡りに新潟海岸を北上し「ジジロ」と三音節で鳴くメボソは、ゼントリとは亜種関係とされてきた。

亜種といえば思い浮かぶのが、ヤクシカとエゾシカだ。表面積と体積の比率からどんぶり鉢の湯は湯呑みの湯より冷めにくい理屈で、寒冷地に適応するエゾシカは体温維持が有利な大形になったという。これは理解できる。しかし素人考えにも、四拍子と三拍子で鳴く鳥が同じ種の別集団だとは信じられなかった。

当時、立教大学院生の斉藤武馬さんが本田さんと共に新潟を訪れ、私達が捕獲したジジロからDNA分析用に採血したのは99年6月だった。あれから13年、今年3月8日付け朝日新聞科学欄の記事によれば、ゼントリとジジロは人類が火を使い始めるはるか昔の、少なくとも190万年以前に分化した別種であることを、分析結果から斉藤さんらがつきとめたという。そして、ジジロは知床以北で繁殖すること、更に北欧スカンジナビア半島などで繁殖し「ジジジ」と鳴く種がいることを確認している。今後はゼントリをそのままメボソムシクイ、ジジロをオオムシクイ、ジジジはコムシクイと呼ぶことになるらしい。

鳴いてくれれば分かるが手にとって見てもなかなか分からないという、外見では識別が本当に難しい幾つかのグループの中で、とりわけウグイス科のムシクイ類には私達調査員は慎重になる。種名違いはあってはならないミスだから。

さて、神戸でのこと「和歌山はあらーい、漁師ことばやから・・・」。盛岡では「秋田は分がんねー」。全国どこでも金太郎飴的な標準語だったら愉しくも何ともない。みんなちがってみんないい。

“ぎっくり首”

生産部部長 山本 知男

年は取りたくないもので・・・、2 か月ほど前 “ぎっくり首” をやってしまいました。

“寝違え” もその種類に入るそうですが、それにしても私の場合はかなり重症でして、右の首、肩、腕、手、指先まで痛んで痺れて、じっとしていても痛いし、動かせば尚更痛い、夜も眠れず、字も書けない、箸も持てない状態でした。整形外科に行ったら “ぎっくり首” と診断され、痛み止めの薬を渡され、安静にしていると言われたけれど、寝ていても痛むから始末が悪い。会社で憔悴しきっていたら会長から鍼を紹介され、社長から整体師を紹介され、大変ありがたかったのですが、ちょっと鍼は怖かったんで整体の方へ行ってみました。

この整体師がなかなか凄い人で、体をいろいろと触って “ん～、首の5 番目の軟骨が出てるな～。これが神経に触って悪さしてるんだよ。” との事。さすがプロだなと感心。何度か整体に通って、だいぶ痛みはなくなって来ましたが、まだ痺れが残っていてちょっと不自由さがあります。手を使わないようにすれば治りが早いそうですが、手は使わない訳にはいかないし、パソコンは止めた方が良くと言われても仕事上どうしても使うし、また楽器もやっていると云ったら、“そりゃ治りが悪いよ” と笑われてしまった。

この間、結構大きな演奏会がありまして、ちょっと調子戻ったもんだから、無理して前日と当日各2 時間のリハをやって、本番臨んだんですが、途中から指先の感覚が麻痺してしまって・・・、とうとう大事な所でミスをしてしまった（泣）。

仲間からは “やっちまったね” と冷やかされ、打ち上げの酒は反省酒でホロ苦かったし、家でもうまく箸が使えなくて、ポロポロご飯をこぼして、ママから “あなたヨダレ掛けがいるね” とバカにされ・・・。無理はいけないなあ～って、つくづく思いました。

そう言えばこの2、3 年調子悪い事ばかりで、いつも体のどこかを痛めて、常に医者通いしている状態です。年のせいにしたくないですが、どんどんと体力は落ちてくる一方なんで、せめて現状維持するよう体力付けて、健康にも気を付けて行かないとダメですね。

皆さんも人ごとじゃないですよ、ご用心。

◆ ちょっと豆知識 ◆ その13

先ずはご報告。

先号にて、麴の分析について皆さま方にご意見を求めましたら、1 件、「お願いしたい」というご連絡をいただきました。引き続きご意見をお待ちしておりますので宜しくお願い致します。

さて、今回は「振動式密度計」によるアルコール測定の話をお話しします。

平成19年6月22日の改正で、国税庁所定分析法（以下『所定法』）に、これまでの浮ひょう法、ガスクロ法、酸化法に加えて、「振動式密度計によるアルコール分の測定」が新たに収載されました。

当時、悲願であった「蒸留操作の要らないアルコール分分析法がついに採用されたか」と酒類の製造現場には確かに色めきたった感がありましたが、内容をよくよく見ると、蒸留操作は従来通り必要で、何のことはない、浮ひょうが高価な分析機器に代わっただけ、ということで、がっかりされた方も多かったのではないかと思います。

蒸留不要のアルコール分析機だと、「アルコメイト」が業界でそこそこ普及していますが、残念ながら所定法に収載された方法でないため、もろみの管理に使うのが限界でした（これはこれで有効な機器だと個人的には思いますが）。

その後京都電子工業から、「DA-105（現在は DA-155）」が、酒類の分析に特化したため当時としては驚異的とも言える 100 万円を切る価格帯で製品化され、「誰が測っても同じ値が出る（はず）」、「浮ひょうみたいに毎年1、2 本破損するということもない」ためか、広く国内の酒類メーカーに浸透しました。

では、蒸留操作無しのアルコール測定は夢物語なのか・・・。

実は既に、ビールの分野では蒸留操作無しの測定法が公定法として採用されています。Anton Paar 社製の「アルコールライザー」なるシステムがそれで、大手ビールメーカー全社が採用しており、実績も豊富です。

失礼ながら余り聞き慣れないこの会社、1967 年に世界に先駆けてデジタル密度計を発表した、振動式密度計の草分け的存在。実際、高機能・高性能な振動式密度計を現在も世に送り出しています。清酒やワインにおける蒸留操作が不要なアルコール分析システムも、所定法に収載されるべく性能評価が進められているとか・・・。

詳しい資料をご用意しております。どうぞお問い合わせ下さい。アルコメイトの中古品も出物がありますヨ。

文責：技術営業部 課長 成田 護 (mamoru@shinyo.co.jp)

新潟で気に入っているもの

エッセイ

生産部主任 島貴 修一

人それぞれで食べ物・酒・気候風土に歴史や文化などだろうが、私が気に入っているものは新潟交通の観光バス（高速バスも）。観光バスの形なんて全国どこでも同じ様なものだから、バス会社は車体の側面をキャンパスに見立てて様々なものを描き個性を出している。一般的にアルファベットの社名や花柄やラインが多いが、大胆な色の組み合わせもあれば逆に水墨画風もあるし、中にはそのセンスを疑ってしまうような色使いも見かける。また基本となる色を派手な色にして、目立たせることで存在を主張しているバスもある。長距離ツアーバスのピンクや東京都内の観光地巡りバスの黄色がそうだ。

では新潟交通の観光バスはどうかというと、一言で言えば控えめだ。白地に緑（幅広）と茶色（細い）のラインが2本と大文字のNが大きく描かれているが、社名のアルファベットは小さい。緑と茶色も彩度をやや抑えた色でこれもまた地味。でもなぜか萌えてしまった。たった二色で描いた単純な図（絵柄）だが、白地をバックにすることでぱっと目に飛び込んで来るし、落ち着いた色使いにも上品さを感じる（個人の感想です）。同じ二色であっても赤と青やオレンジと紫の組み合わせだったりしたら、けばいと感じるだけで好感を持つことはないだろう。

ところがこんなにも観光バスには思いを寄せているが、同社の路線バスとなると話は違って来る。通称「銀バス」で銀色の車体に青いラインまでいいが、赤い屋根（ルーフ）は雰囲気を壊している。停留所でバス待ちをしている時に、遠くからバスの赤い屋根が見える視認性の良さは認めるけど、銀色と赤は相性が悪い。同社には銀色をベースにしたシンプルなデザインの「21世紀の銀バス」を走らせて欲しい。